

## 『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』

山本 崇雄 著 (2015)

学陽書房 127 ページ

安田 明弘

早稲田大学大学院 教育学研究科

本書は、筆者の掲げる生徒の生涯英語を自ら学び続ける力を育て、「自立した学習者」を育てるという目的のもと、そのための手段としてアクティブ・ラーニングの具体的な手法を取り入れた英語教育における実践例を数多く提案している。先に掲げた目的に基づき、著者は本書におけるアクティブ・ラーニングを Bonwell & Eison (1991) の 5 つの定義を基に、①英語の「学び方」を能動的に英語で学ぶ活動、②英語を使って多様な考え方を能動的に学んだり、自分の考えを表現したりする活動として定義している。①の定義は、筆者が目的として掲げている「自立した学習者」に直結するものであり、英語を学ぶ過程を通して能動的な「学び方」も習得して欲しいという意図が感じられる。また、②の英語を道具として実世界の中で情報を収集し、表現するために使っていくための能力を養うということであると考えられる。

本書の構成としては、全 5 章からなっており、1 章と 2 章では、アクティブ・ラーニングとは何かという先に述べた定義からはじまり、英語教師は授業をアクティブ・ラーニングな学びの空間にするために教師はどのような心構えを持ち、どのような役割をはたすべきか、という部分を重点的に述べている。特に教員の役割に関して、ファシリテーターという言葉を用い、「生徒の自立を助ける存在」として教師は生徒に学び方を教えたり、学びを手助けしたり、生徒が学びに躓いた時に動機付けをしたりする存在としている。3 章は、この本のメインとも呼べる章で、実際の英語科の指導におけるアクティブ・ラーニングのアクティビティの手法と実際の実践例を、ハンドアウトや生徒の作品を紹介しながら、非常に丁寧に解説している。アクティブ・ラーニングの活動として有名な Think-Pair-Share やジグソー法の活用はもちろんであるが、サイトトランスレーションやクレジットロールリーディング（字幕読み）から音読指導、文法ドリルまでもグループ活動やペアワークの形で生徒が協働する工夫がされていく点に注目したい。文法ドリルのようなワークシートであれば、個人で行うのが当たり前であるが、著者は生徒が 1 問いたら自分のプリントを前

の人に回し、受け取った人がその解答の答え合わせをして、また 1 問解いて前に回す paper-go-around という手法を用いて、生徒同士で協働される手法を提案している。また、音読指導においても先生がモデルを出し生徒はそれに続いてリピートするのではなく、生徒がペアとなり互いにモデル出しとリピートをし、更に自分たちでモデルの CD を聞いてよりモデルに近づけるようにしていくという活動が紹介されていた。生徒同士が互いに正しいモデルを出そうとするなかで、自発的に学ぶ仕掛け作りである。4 章では 3 章で紹介したそれぞれの活動を授業指導案として、1 つのレッスンの中でどう組み合わせ落とし込んでいくかという点に関して、実際の指導案の例を使いながら解説している。また、教師が「教えない授業」をどう作っていくかという具体的な 3 段階のプランが紹介されている。そして、最後 5 章では、FAQ のような形式で、生徒、保護者、同僚の教員から批判が来た際の対応について軸となる方向性を示している。

本書を通して見える著者の実践において特筆している点は、アクティブ・ラーニングの手法を英語教育の実践の中に落とし込み、それらを現場の教員向けに分かりやすく整理し、まとめている点だけではない。英語の「学び方」を徹底的に教え、生徒がその学び方を習得し、自由に「学び方」を選び取れるまでをアクティブ・ラーニングを通して行っている点である。どうすれば生徒は「学び方」を習得することができるのだろうか。まずは、学びのバリエーションをインプットすることである。音読活動を 1 つとっても、ペアで Reading Relay, Reading Race, Shadowing Check, Read & Look up と様々な学び方をインプットし、最終的に自分にあった学びを生徒自身で選択させている。このように様々な学び方をインプットすることがまず必要である。そして、それらの学びを内在化・自動化していくためには何が必要なのだろうか。先ほど紹介した音読指導でも生徒同士がモデルを出し合うというものがあったが、著者の実践の中で生徒は Small Teacher として互いに教え合う経験を積んでいる。4 章の「教えない授業」の中で、クラス内でのアクティビティの進行を生徒に英語で任せるといったものが紹介されていた。初期段階として、5 分間ほどの帯活動の指示出しや活動のコントロールを生徒が行い、徐々に既に慣れている活動のコントロールを生徒に委任していき、最終的に生徒がオリジナルの教科書指導をする機会を作るというものである。このように生徒自身が教える側に立つ経験を自然と積んでいる。また、筆者は、ミニツツペーパーやリフレクションペーパーという形で、生徒が自分たちの学びや学び方に関して振り返り、共有する機会も設けて、その重要性も本書で説明している。

最後に、本書で紹介されているような活動を英語教育研究の文脈から裏付けようとするとうなるのだろうか。学習者要因における動機付け理論の 1 つである自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985, 2002) というものがある。4 章の「教えない授業」の段階 2 において、

「〇時〇分までに、教科書〇ページの内容を絵を使って説明できるようになる」というゴールだけが設定された活動が紹介されていた。具体的で実現可能な課題設定を教員が行い、練習方法を生徒に選択させる活動である。この活動を自己決定理論のフレームワークを使って分析すると、まず課題における達成手段を生徒が選べるようにすることで、生徒の中で選択の余地が生まれる。これにより「自立性の欲求」が満たされる。そして、実現可能な課題を1つずつ達成することにより、「有能性の欲求」も満たすことができる。更に、クラスメイトと協働したり、競争したりする中で課題を達成することにより、「関係性の欲求」もまた満たすことが可能だろう。

自立した英語学習者を育てるための実践のスタートラインとして、本書を手にとってみてはいかがだろうか。

## 参考文献

- Bonwell, C.C., & Eison, A.J. (1991). *Active Learning Creating Excitement in the Classroom*. Jossey-Bass.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (Eds.). (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.